

福永紙工株式会社

オリジナルファイルの作成など
知財管理までも積極的に楽しむ

長年培ってきた印刷・加工の技術に、企画力をプラス。
アイデアを創出しながら数々のオリジナル製品を生み出し、
国内・海外を問わずさまざまな業界のニーズにも応えている。
また、デザイナーやアーティストとのコラボレーションによる
「かみの工作所」「TERADA MOKEI」「紙工視点」などのプロジェクトを
次々と立ち上げて、紙とデザインの可能性を大きく広げている。

主な権利

2009年：商標登録 第5288664号
2010年：意匠登録 第1391586号
2010年：商標登録 第5372244号
2011年：意匠登録 第1406936号
2019年：商標登録 第6160662号

会社概要

所在地：東京都立川市錦町 6-10-4
電話：042-523-1515
URL：http://fukunaga-print.co.jp
業種：パルプ・紙・紙加工品製造業
設立：1963年（昭和38年）
資本金：4,800万円



代表取締役：山田 明良さん（左）
工務室 構造設計士：宮田 泰地さん（右）

紙自体が主役になるという
オリジナルの紙製品を開発

1963年の創立以来、印刷・加工のプロフェッショナルとして、主にパッケージを受注製作してきた福永紙工株式会社。さまざまな紙製品を生み出すメーカーの機能を持つようになったのは、2006年頃のことである。「従来型の受注形態のほかに、ファクトリーブランドとでも言いますか、自社で製品開発を行い、工場で製造して販売までを行う取り組みを始めました。それは、私が社長業を継いだこともきっかけでした」と山田社長は語る。以前はアパレル業界にいたこともあり、デザインやアートには大きな関心があるという山田社長。パッケージだけでなく、仕事の中にクリエイティブな要素を取り入れて、「紙が主役になる」という製品の開発・販売につなげた。

最新のテクノロジーと
紙との融合が開く新世界

メーカーとしてアイデア製品を世に出し、情報を発信するようになってから、仕事の幅がどんどん広がってきた。多摩地域の印刷会社というポジションが、日本中へ、そして世界へと拡大。紙を使った特殊な構造設計などの案件について、国内・海外を問わずに相談される機会も増えた。近頃は、最新のテクノロジーと組んで、今までになかった画期的な製品を生み出すことも多い。

ビジュアルデザインスタジオ「WOW」によるインタラクティブ・インсталレーション「BAKERU」に使われた「紙のお面」もその一つ。お面を被ってスクリーンの前に立つと、自分が変身したキャラクターが映し出され、こちらの動きに合わせて異世界で生き生きと動き出す。このためにセンサーを内蔵した特殊な「紙のお面」を作ってほしいというニーズに、同社は技術力で応えた。「今はプロジェクトベースで新たなモノづくりを行うことが、仕事の3分の1くらいになっています。デジタルの世界における有名企業のクリエイティブチームが、紙のことを面白がっ

てくれる。だから、コラボレーションで
きる機会がとて増えています」と山田
社長は楽しそうに語る。

意匠出願では図面や写真など
どう提出するか戦略も大切

知財センターのことを知ったのは、多摩支援室のオープニングの時だという。「商標などの大切さもよく認識し始めていましたが、登録するにはお金もかかりますし、これはたいへんだと思っていた頃です」と山田社長は語る。

2011年に紙工ディレクターの宮田氏が入社してからは、宮田氏が知財担当者となった。「『かみの工作所』というブランドの立ち上げの頃から、知財に取り組むようになりました。どの製品で出願するかなど、知財センターの製品化アドバイザーに、気軽に相談するようになりましたね。特に意匠登録の出願では、紙は薄いものですから、必要な図面の表現にはとても苦労します。そうした部分でも、良いアドバイスをもらいました」



かみの工作所

一枚の紙を道具にすることをテーマに、2006年に発足した「かみの工作所」。デザイナーの斬新な発想と、工場の製造技術を合わせて、紙の可能性を追求するプロジェクトである。

紙を立体に組み立てる、どの段階のものを図面や写真として提出するか判断も難しく、部分意匠にするか、全体意匠にするかの判断も重要だと言う。

知財関係の書類を整理して
「見える化」という工夫

プロダクトデザイナー出身の宮田氏は、同社の知財担当になったことについてこう語る。「そんなに知識があったわけではありませし、美術大学で学んでいた時に、知財についても多少講義を受けた程度です。ですから、ほとんど実務を通して教わりながらやってきました。ただ、仕事をしてみると知財関係の書類がどんどん増えるので、管理の仕方を考えた方がいいと気づきました。そこで自分なりにオリジナルの背表紙のあるファイルを作成して、出願や登録などの流れに沿ったチェック欄を作って管理しています」
宮田氏オリジナルファイルは、知財管理までも積極的に楽しもうという独自の視点を保有。同社の開発製品に通底する

ようなアイデアがある。このファイルがあれば、長期に渡る書類のやり取りを、混乱せずにまとめることができる。意匠はブルーで、商標はグリーン。棚に入ったファイルの背表紙を見ただけで、それぞれの進捗状況が分かる。「すごくアナログなやり方なんですけど」と謙遜される目が優しく微笑んだ。

知財センターは気軽に安心を
得るためのホームドクター

改めて知財センターの製品化アドバイザーについて尋ねると、宮田氏は「ある展示会の直前に、ほとんど駆け込みのように意匠を出願する際、必要書類の用意などでずいぶん支援してもらいました。社外のデザイナーとのやり取りの部分で



2011年に発足した、建築家・寺田尚樹氏との協働プロジェクト「TERADA MOKEI」。建築事務所に向けて「1/100建築模型用添景セット」シリーズを発売して以来、世界の都市編、スポーツ編、樹木編など数々のアイテムをシリーズ化。毎月新製品を発表し続けている。



同社の知財を管理するためのオリジナル背表紙付きファイル。色分けやチェックボックスなどによるシンプルな工夫が施されている。

も、どういう点に気を配ったらよいか、気軽に相談しています」と語る。

山田社長に知財獲得の効果について尋ねると、「何らかの形で出願はしていますから、模倣などへの抑止力にもなっていると思います」と語る。「知財センターはホームドクター的な存在ですね。ちょっと言いすぎかもしれませんが（笑）。今後は海外での製品販売も増えていくでしょうし、流動的な知財というものに対して、ますます多岐に渡って相談していきたいと思っています」

紙一重という言葉があるが、同社のオリジナルリティは、ちょっとした工夫、なんでも面白がり楽しもうという明るい姿勢から発している。その紙一重がいくつも重なってこそ、きっと多くの人が惹かれる、ワクワクする明日が生まれてくる。



知財化のプロセスまでも楽しむ「プチ働き方改革」

「かみの工作所」というプロジェクトを立ち上げられて数年というメーカーとしての草創期に本格的な知財支援を開始しました。商品の性格上、デザインや商品名、著作権などの取り扱いが重要なポイントになりますが、工夫しながら楽しく知財に向かい合う姿勢は、働き方改革のヒントにもなると感じます。
担当：秋葉原 笹原製品化アドバイザー